

聖書を踏まえた英詩評釈* (Ⅱ)

— P.B.Shelley —

奥 田 喜八郎**

(英米文学)

要旨：英語英文学を学習する者にとって、神話とシェークスピアと聖書は必読の書である。世界の二大思潮にうちのヘレニズムはその源流がギリシア神話にある。またキリスト教徒にとって、神の啓示は神の言葉である聖書を通して与えられる。それ故、聖書を理解するためには聖書の語義の研究が最も大切である。更に作品中に果すシェークスピアの役割とその重要性もまた然りである。これらは、もはや欧米人の専有物ではなく、人類の文化的遺産として、私達日本人学徒の教養の一要素となりつつある、というのもまた事実である。

キーワード：聖書に明示された adove のイメージ

シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) は、“A Song” と題して次のように歌い上げているのである。——

A widow bird sate mourning for her love
Upon a wintry bough;
The frozen wind crept on above,
The freezing stream below.

There was no leaf upon the forest bare,
No flower upon the ground,
And little motion in the air
Except the mill-wheel's sound.

これは、ご覧の通り、4行を一連として、二連から成り立っている作品である。先ず、この詩品の全体の韻律 (metre)²を調べてみると、第一連のリズムと第二連のそれとは、全く同じ韻律なのである。すなわち、両者とも、「弱強調」(iambus) が使用されていて、しかも、両者はともに、1行目は「5歩律」(pentametre)³であり、また、2行目は「3歩律」(trimetre) である。

* On Percy Bysshe Shelley's Poem, "A Song" with Notes Based upon The Bible (Ⅱ)

** Kihachiro OKUDA (English & American Literature, Nara University of Education)

そして、3行目は「4歩律」(tetrametre)であり、更に、4行目は「3歩律」となっているのである。一条乱れず、整然とうたわれているのも、詩人シェリーの特長である。

このように、「4行詩」(quatrain)⁴——別に、「4行連句」——というスタンザー (stanza) は、イギリスでは最も広く愛用されている詩形である。この「4行連句」の「押韻構成」(rhyme)は、通常、a b a b, と韻を踏むものである。また、a a b b, という風に、「2行連句」(couplet)を2つ重ねるものもあるのであるが、しかし、シェリーのうたう“A song”のそれは、前者の、つまり、a b a b, という通例の韻の踏み方が用いられているのである。第一連の「脚韻」は、——“love/bough/above/below”——というa b a bであり、また、第二連の「脚韻」は、——“bare/ground/air/sound”——というc d c dなのである。リズムといい、押韻といい、これは完璧な歌い振りである。鋭敏な感覚から創造された、この詩形の美の靈妙さに、まず注目されたい。もちろん、問題とすべき小さな個所もある。たとえば、第一連の第2行目のbough [bau]と、第4行目のbelow [bilóu]という押韻は、おかしいではないか、という指摘があろうかと思う。しかし、よく吟味してみると、“below”は、[bilóu]も然る事ながら、[biláú]と発音しても好いのではあるまいか。

詩人シェリーの、この詩品に寄せる詩形の美の靈妙さについて、もうすこし、つぶさに説明しておきたい。心静かに、この一篇の詩をもう一度口ずさんでみようか。そうすると、第一連において、最初に耳に聞こえてくるのは、‘w’という摩擦音であり、また、‘b’という破裂音であり、そして、‘f’という摩擦音である。なんと多くの‘w’という音——たとえば、“widow” “wintry” “wind”——が用いられている事か！また、‘b’という音——たとえば“bird” “bough” “above” “below”——が使用されていることか！そして、‘f’という音——たとえば、“for” “frozen” “freezing”——が繰り返されている事か！更に、‘r’という音——たとえば“bird” “mourning” “for” “frozen” “crept” “freezing” “stream”——もまた見落せぬ音である。これらは、正確に、「頭韻」(alliteration)と呼ぶことは困難であろうが、しかし、「頭韻」というのは、強勢のある単語の初めに來ている類音の「子韻」(consonant)にも適用される事を思い併せてみると、満更間違いはあるまい。また、「母韻」(assonance)も、然りである。無論、全く同じ母音(vowel)に越した事ではないが、しかし、類音のシラブル(syllable)にも適用されることに、注意しよう。たとえば、上記にすでに指摘しておいた、“bough”、“below”という母韻がまさしく、類似音に属するものである。

「母韻」といえば、耳を澄ませてみると、一番よく、そして、一番力強く聞こえてくるのは、——“widow” “mourning” “wintry” “wind” “freezing” “stream”——という‘i’という単母音であり、‘i:’という長母音である。そして、——“mourning” “Upon” “for”——という‘u’という単母音であり、‘u:’という長母音である。また、——“love” “above”——という‘a’という母音も忘れがたいものである。このような、頭韻にしる、母韻にしる、これらは、この詩の第一連全体の調べをより一層流麗に仕上げていることに、注目しよう。第一連の中には、これ以外にも、たとえば、——“widow” “bird” “wind”——という‘d’の子韻もあれば、また、——“sate” “wintry” “crept” “stream”——といった‘t’という子

韻も調子よく奏で合っていることに、注意しよう。これは詩人シェリーの意識した工夫による調子であろう。あるいは、たとえそれは詩人シェリーの意識しない調子であるとしても、この第一連全体の調子に、よりなだらかで美しい調べを添えている事も、事実であろう。また、—— “mourning” “Upon” “wintry” “frozen” “wind” —— といった、‘n’ という歯茎音といい、更に、—— “frozen” “freezing” —— といった ‘z’ という歯茎音などもまた切ない調べを添えている事も、忘れがたい。

次に、第二連全体の調べを吟味してみることにしよう。最初に聞こえてくるのは、‘l’ の側音であり、また、‘f’ の唇歯音であり、そして、‘t’ の破裂音なのである。たとえば、—— “leef” “flower” “little” “mill” “wheel” —— といった風に、‘l’ の「頭韻」(「子韻」を含めたもの) がなんと多く用いられている事か！また、—— “leef” “forest” “flower” —— といった風に、‘f’ の「頭韻」(「子韻」を含めて) が使用されている事に、注目しよう。そして、—— “forest” “little” “motion” “Except” —— といった風に、‘t’ という「子韻」がこんなにも繰り返されている事に、注目されたい。この外にも、よく耳を澄ませてみると、たとえば、—— “no” “upon” “no” “upon” “ground” “And” “in” “sound” —— といった、‘n’ の「子韻」も、こんなに多く用いられているではないか。更に、—— “was” “forest” “Except” “wheel’s” “so-und” —— といった、‘s’ と ‘z’ の「子韻」といい、また、—— “was” “wheel’s” —— といった ‘w’ の「子韻」といい、そして、—— “ground” “And” “sound” —— といった、‘d’ の「子韻」といい、その上、—— “upon” “upon” “Except” —— といった、‘p’ の両唇音や —— “motion” “mill” —— といった、‘m’ の両唇音なども、やはり、忘れがたいものである。これらの「頭韻」や「子韻」は、この詩の第二連全体のリズムをより一層なめらかに強化している事も、事実である。

「頭韻」や「子韻」も然る事ながら、「母韻」もまた、詩人シェリーの詩的工夫が十分に施されている事に、大いに驚かされるばかりである。たとえば、まず、聞こえてくる母韻といえば、‘o’ という「母韻」であり、‘ou’ という「母韻」であり、‘i’ という「母韻」であり、‘au’ という「母韻」なのである。たとえば、—— “was” “upon” “forest” “upon” —— といった、‘o’ という母韻がこんなにも繰り返し用いられているのである。また、—— “no” “N o” “motion” —— といった風に、‘ou’ という二重母音を使用されているし、そして、—— “leef” “little” “in” “Except” “mill” “wheel’s” —— といった風に、‘i’ あるいは、‘i:’ という母韻がこんなにも多く用いられているではないか。さらに、—— “flower” “ground” “sound” —— といった、‘au’ という二重母音にせよ、—— “there” “bare” “air” —— といった、‘εə’ という二重母音などもまた、見落せぬ「母韻」なのである。

以上、「子韻」を含めた「頭韻」にしろ、「母韻」にせよ、これらはともに、この一篇の詩全体のリズムに、流れるような、なめらかな調べを切実に添えているのだと思う。この流麗なリズムの中で、時に、“mourning” “upon” “wintry” “frozen” “wind” “no” “upon” “N o” “upon” “ground” “motion” “in” “sound” といった ‘n’ の「子韻」と、—— 思うに、この ‘n’ という「子韻」は、この詩全体の主音であろうと思われるのだが、—— “widow”

“wintry” “wind” “was” “flower” “wheel’s” — といった、 ‘w’ という「子韻」とによって、一層なめらかに補強されているという事に、大いに注目したいものである。“sate” “wintry” “crept” “stream” “forest” “little” “motion” “Except” といった、 ‘t’ の「子韻」も、主音の1つであろう。

「母韻」の主音は、なんといっても、“widow” “wintry” “wind” “freezing” “stream” “leaf” “little” “in” “mill” “wheel’s” といった、 ‘i’ という母音なのである。そして、“mourning” “for” “upon” “was” “upon” “forest” “upon” といった、 ‘o’ という母音もまた、主音の1つなのである。思うに、これらの主音の1つ1つが、ある時には力強く、荘厳に奏でられていて、また、ある時には切切と、哀切極まって奏でられているのは、見事である。そして、ほかの「母韻」と「子韻」とうまく調和し、融合した絶妙なメロディーに託して、詩人シェリーは、断頭台で処刑された夫に寄せる妻の悲歎と怒りの極地を厳粛にうたい示しているのも、いたわしい限りである。それも、氷の張り詰めた大自然の中で厳格に表白されているのも、絶品である。この、冬の極寒の風景その物は、まさに、詩人シェリーの「心の風景」その物である、というのもすばらしい限りである。自然と人間と、事件とが一寸の透き間もなく、ぴったりと調和し、混用し、融合している作風であるというのも、イギリスの詩歌に於いては、本当に珍しい作品であると言えようか。

この珍品の玉詩を心して低唱してみると、思い出されるのが、わが国の、江戸中期の俳諧師野沢凡兆（? - 1714）の、 — 「捨舟の内外こおる入江かな」 — という発句である。この名句もまた、なんという詮無き不運の身の上をうたい上げた作風であろうか。凡兆は、この一句の示す通り、印象鮮明で、しかも、格調が高い句風の俳諧師であることを思い起すと、詩人シェリーもまた、印象鮮明で格調の高い荘厳な詩風の抒情詩人であると言えようか。凡兆は、捨舟に託して、またシェリーは寡婦鳥に託して、異常なまでの悲歎と怒りを切切とうたい上げているのも、印象深い。また、両者とも、冬という極寒の風景に託して、人の世の無情と冷酷と冷淡さとの極地をこれでもか、これでもかとうたい伝えているのも、気の毒すぎる。

なにはともあれ、詩人シェリーは、恐らくは、このようにうたい上げているのではあるまいか。

寡婦鳥が一羽 冬枯れの大枝に
止まりて 夫の死を悲しんでいる、
凍てつく風が 上空を這ひ
凍てつくような水が 下界をゆく。

冬枯れの林には 一枚の葉もなく、
大地には 咲き匂う花もなし、
大気にも 動くものさえなく
ただ水車のまわる音のみが…。

これは、詩人シェリー晩年の、しかも、未完成の劇詩 *Charles I*⁶ の中に紹介されている作品なのである。それも、チャールズ一世のお抱えの道化師 Douglas Archy が物悲しく切切と独唱しているものである。

ご存知の通り、チャールズ一世（1600－49）という国王（1625－49）は、James I 世（1566－1625）⁷ の子供であって、あの有名な「清教徒革命」（The Puritan Revolution）⁸ によって、断頭台で処刑⁹ された悲運の王なのである。また、このチャールズ一世の後は、フランスの Henrietta Maria（1609－69）という女王である。ヘンリエッタ女王はチャールズ一世よりも9歳年上であって、妃として、とても聡明な女王であつたらしい。詩人シェリーの歌う、“A song” と題するこの一篇の短詩の中に規定されている、いわゆる、—— “A widow bird”（「やもめ鳥」）—— というのは、もちろん、この悲劇の女王、ヘンリエッタ・マリアその人を明示し、そして、—— “her love”（「夫（つま）」）—— というのは、申すまでもなく、悲劇の主人公チャールズ一世その人を明記している作風なのである。重複するが、この一篇の詩は、妃 Henrietta Maria が、「叛逆の罪科を以て裁判に付されて、有罪の判決をうけて、1649年に斬首刑に処された」¹⁰ 夫君 Charles I 世の死を哀悼する、という切実な悲歎と、怒りの玉詩なのである。そして、国王斬首刑後、約20年の間、妃 Maria は夫君の喪に服しながら、二人の子供の養育にいそしむのである。長兄は、のちの、国王となった、Charles II 世¹¹ であり、次兄は、のちの、国王となった、James II 世¹² なのである。いわば、この時代は、激動の時代であった。「この時代の文学を理解するためには、その時代の政治の状態を勉強しなければならない。つまり、前の時代—— John Milton（1608－74）—— の文学は宗教問題と密接な関係があるけれども、王制回復以来の文学は宗教問題がむしろ隠れて、主に政治問題に変わ」¹³ っている事に、大いに、注意したものである。というのは、この一篇の詩の背景は、まさしく、宗教問題を含めながら、政治問題が爆発した、まさに激変の時代であるからだ。願わくば、この拙文に添えた「註」の説明を踏まえて、この時代の激動の変遷の様子を理解していただきたい。更に、本格的に、この激動の時代を研究したい読者のために、すばらしい『英国史』を紹介しておきたいと思う。それは、あの著名なイギリスの歴史家マコーリー（Thomas Babington Macaulay, 1800－59）の名著、*The History of England*（1848、1855）¹⁴ である。この『英国史』の前半は、「革命の歴史」を論述したものであり、また、後半は、「反革命の歴史」を論究したものである。まず、諸君に、これは手始めの書物として、是非とも推覧したい最適の『英国史』である。

丁度この危機に際してジェームス一世は逝去し、チャールズ一世が即位した。チャールズ一世は父王よりも遥かに勝れた理解力、遥かに強力な意志、遥かに澁刺且鞏固な気質等を生来的にもち、また父王の政治的見解を受け継いで、それを実行せんとする意志は父王よりも激烈であった。宗教上では父王と同じく熱烈な監督教会員（英国教会員）であると同時に、父王と違って熱心なアルミニウス教徒（カルヴィン教に反対した教派）でもあって、旧教徒ではなかったにしても清教徒よりも旧教徒の方を遥かに好んでいた。チャールズが善良な国王

としての若干の性質、否、偉大な国王としての性質さへも有していたことは事実である。彼には父王の如き学者的正確さが欠けていたが、常識ある聡明な紳士として書き且つ話すことが出来た。文学や美術に関する趣味も勝れたもので、態度は優美ではなかったにしても威厳あるものであり、また私的生活にも何らの汚点も存在しなかった。チャールズの災禍の第一原因となり且つ彼の記憶を汚した第一原因となったものは背信であった。事実、彼の陰険且つ邪悪な行動は不治の性格に起因したものであった。チャールズの良心が小事に頗る敏感でありながら、この大きな悪徳に無感覚であったことは奇妙に見えるかも知れないが、彼は生来的且つ習慣的に背信的であったのみでなく、原理上からも背信的であったのである。彼は、最も尊敬していた神学者達から、彼と臣下との間には相互的契約というのが如きものは何ら存在せず、またたとへ自から意志したとしても専断的権力は自己から分離させることが出来ず、彼の約束には総て暗黙裡の保留が含まれ、かかる約束は必要な場合に破棄し得るもので、彼はこの必要な場合を決定する唯一の判事であるということ等を教えられたのであった。

これは、中村経一訳『マコーリー英国史』からの長い引用文である。ここに言う、チャールズ一世は、「父王と違って熱心なアルミニウス教徒」であったというのは、耳新しい情報である。「アルミニウス教徒」というのは、オランダの神学者アルミニウス（Jacobus Arminius, 1560—1609）¹⁶の本名に因んで名づけられた名称なのである。アルミニウスの思想は、——「カルヴァンやベザよりもルターに近いといわれているが、その寛容精神はむしろ近代自由人のそれに似ている。彼の死後展開されたレモンストラント派（いわゆるアルミニウス主義）は、彼から始まったといわれているが、彼自身の教説にはそれほど定式化された教理的主張は含まれていない」¹⁷ようである。

然し、「アルミニウス主義」（Arminianism）の抗議書の5か条は、次の通りである。——① 神は永遠の初めよりすべての信者の救われることを定め、② キリストは全人類のために死んだが、その罪のあがないを受けるのは信者に限られること、③ 信仰は人間における聖霊のはたらきであること、④ 神の恩恵がなければ、人間は至善に向うことができないが、それを拒否することもできること、そして、⑤ 真の信仰によってサタンと世に勝つ力を与えられたものでも、のち、ふたたび墮落することがあることなど、「恩恵の普遍と人間意志の自由」¹⁸を高調したもののなのである。「アルミニウス派は近代オランダおよびヨーロッパのプロテスタント神学に、かなりの影響を及ぼし、イギリスでは、メソジスト運動に影響を与えた。また、イギリスから北米に行ったものは、ソツティーニ派および反三位一体派と合流し、種々の派を生じ、神学のみならず、近代思想の形成においても、すくなくとも影響を与えた」¹⁹とされているものである。

それはそれとして、重複するが、チャールズ一世は、宗教上では、父王ジェームス一世と同じく熱烈な「監督教会員」、すなわち、「英国教会員」であると同時に、父王と違って熱心な「アルミニウス教徒」、いわゆる、「カルヴィン教に反対した教派」でもあって、「旧教徒即ちローマ・カトリック教徒」ではなかったにしても、「清教徒（Puritans）²⁰」よりも、「旧教徒」の方をはるかに好んでいた、というのは非常に興味深い。このチャールズ一世が1625年に即位し、そのあ

とに、Puritans 弾圧をいっそう激化し、ついに、1642年に、Puritansが大多数を占める国会と国王とが衝突し、8年にわたる内乱がおきて、1649年には国王チャールズ一世が処刑される、という前代未聞の「国王斬首」がおこなわれた忌むべき激変の時代なのである。

念のために、オランダの宗教改革者アルミニウスが唱導した、Arminianismの要点を以下に紹介しておこう。というのは、上記にすでに指摘しておいたように、チャールズ一世は、熱烈な英国教会員という立場を踏まえて、父王ジェームス一世と同じように、ピューリタン教徒を弾圧した事実も然る事ながら、熱心なアルミニウス教徒であったという別の強固な立場から、父王ジェームス一世と違った意志で、ピューリタン教徒を徹底的に弾圧を激化させた、と思われるからである。アルミニウス教徒とは、すなわち、カルヴィン教²¹に反対した教派であることを思い起こそう。そして、ピューリタン教徒とは、カルヴィン教を信仰している教派であることを思い出そう。

つまり、カルヴィンの教えを受けながら、「予定論」に疑問をいだいた、オランダの宗教改革者アルミニウスの唱導した、「アルミニウス主義」の要点²²というのは、つまり――

① 神は何びとをも不信仰に予定しなかった。② キリストは選ばれた者だけのためではなく、万人のために死んだ。③ 回心は聖霊による恵みとしておこるが、④ 恵みは不可抗的はでない。⑤ 信仰の保持はただ恵みによるのではない、というのがこれである。ここに言う、Calvinismの厳格な「予定論」というのは、キリスト教神学において、人間は救われるか、滅するかにあらかじめ定められている、とする説なのである。このカルヴィンの「予定論」にたいして、アルミニウスはそれは誤っていることを確信し、さらにその確信を深く持つようになったことに、注目されたい。いわゆる、Calvinの教えを受けながら、カルヴィン的な予定論と恩恵論に大いに疑問を抱いていたのが、アルミニウスその人であった事に、注意しよう。それが、尖鋭化して、国内の教職者までが2つの陣営に対立するに至った状況を鑑みてみると、国王チャールズ一世は、この2つの対立の陣営――すなわち、①カルヴィン派²³と、②アルミニウス派と――の陰悪な形勢を見極めながら、一方のアルミニウス教徒会員である、という立場を利用して、有利に、ピューリタン教徒の迫害にいっそうの拍車をかけるに至ったのではあるまいか、というのが私の愚見なのである。つまり、チャールズ一世は、わが日本風の下卑た言い方をすると、「二足の草鞋」をはいた国王であったかと思われる。同じ人が両立しないような二つの職業や立場――すなわち、① The church of Englandの会員であり、同時に、② アルミニウス教会の熱心な会員であるという立場――をうまく使いわけて、その宗教上の対立した激化の時代の中でうまく立ち回ろう、と腐心した国王チャールズ一世であったのではあるまいか、というのが私の、この拙文の着目なのである。

ここで、上記にすでに論述しておいた、「アルミニウス主義の要点」に対して、改革派教会がドルトレヒト会議（1618-19）を開き、いわゆる、Calvinist Five Pointsを制定²⁴したという。その、Five Pointsを以下に紹介しておくのも、無駄ではあるまい。各項目の頭文字を並べてTULIPと覚えるとよいかも知れない。――

- ① Total depravity. (人間はアダムの原罪によって生まれながら墮落していて、自由の意志を行使しえない)

- ② Unconditional election. (神はみずからが救いたいと望む者だけを救う)
- ③ limited atonement (キリストは万人のために死んだのではなく、救いに定められた者だけのために死んだ)
- ④ Irresistible grace (恵みは望むことも、拒むこともできない)
- ⑤ Perseverance of the Saints. (神によって選ばれる者には、神の意志を行なう能力が与えられる)

というのがこれである。あの「アルミニウス主義の要点」と読みくらべてみると、そこに、大きな相違点が一層、明白となるであろう。その相違点の、1つ目は、「予定論」であり、また、その2つ目は、「恩恵論」である。

国王チャールズ一世は、英国教会員であると同時に、カルヴィン教に反対していた教派、すなわち、アルミニウス教徒の熱心な会員でもあった国王なのである。この熱心な「アルミニウス教徒会員」であった国王チャールズ一世に対して、のちの、ロマン主義を代表するP.B.シェリーが共鳴と、同情と、愛情を寄せて最後の創作に専念しようとしたのが、この未完成の劇詩 *Charles I* なのである、と強調しておきたい。この「二足の草鞋」が却って、不幸にして、のちの、ピューリタン教徒弾圧によって、国王チャールズ一世自身の命取りへと発展してゆくものであるのだが…。また、いみじくも、イギリスの歴史家マコーリーも、自著『英国史』の中で——「チャールズの災禍の第一原因となり且つ彼の記憶を汚した第一原因となったものは背信であった」——と論破しているのであるが、しかし、思うに、チャールズの背信もまた、国王自らの「二足の草鞋」に大きく起因している事を、次に続篇〔Ⅲ〕の中で、妃 Henrietta Maria の宗教観とともに論究してみたい、と愚考している次第である。

註

- 1 吉竹迪夫著『愛誦英詩選 (増補版) —— その理解と鑑賞』(東京、中教出版、1981年)、P. 80。
- 2 歩律の種類は、次の4種類である。(1) Iambus (=iambic foot) (「弱強調」)(2) Trochee (=trochaic foot) (「強弱調」)。(3) Arapaest (=anapaestic foot (「弱弱強調」)(4) Dactyl (=dactylic foot) (「強弱弱調」)。
- 3 詩の1行の長さは、次の8種類である。(1) monometre (2) dimetre (3) trimetre (4) tetrametre (5) pentametre (6) hexametre (7) heptametre (8) octametre。ただし、(4) 番目のtetrametreを、別に、quatrametreともいう。
- 4 スタンザーには、(1) Couplet (「2行連」または「対連」) —— これは、押韻する2行から成るもの。(2) Triplet (「3行連」) —— これは押韻構成は3行とも同じもの。(3) Quatrain (「4行連」) —— これは最も広く愛用されているもの。(4) Rime Royal (=Seven-Line stanza) (「7行連」) —— これは押韻構成は、ababbccのもの。(5) Ottava Rime (=Eight-Line stanza) (「8行連」) —— これはIambic pentametreの8行連で、ababbccの押韻のもの。(6) Spenserian stanza (=Nine-Line stanza) (「9行連」) —— これはEdmund Spenser (?

1552-99) がItalian formであったottava rimaによって創始したもので、Iambic pentametreの8行に、Iambic hexametre (=Alexandrine) の1行を加えたもの。押韻構成は、ababbcbccのもの。(7) Fourteen-Line stanza (「14行連」) — 14行詩といえば、ご存知のように、ソネット (sonnet) と一応考えてもさしつかえないのだが、しかし、ソネットとなると、次の3種類に大別することができる。すなわち、(i) Petrarchan Sonnet (=Italian Form) と、(ii) Shakespearean Sonnet (=English Form) と、それに、(iii) Spenserian Sonnetなどがある。☆これらは、上記の吉竹迪夫著『英詩選』の中の説明によるものである。

5 Rhyme (「韻」) には、(1) End rhyme — (i) perfect rhymeと、(ii) imperfect rhyme。(2) Identical rhyme (=rime riche)。(3) Eye or Visual rhyme。(4) Masculine rhymeとFeminine rhyme。(5) Internal rhyme(=inner rhyme)。(6) Alliteration。(7) Assonance。(8) Consonantなどがある。

6 詩人シェリーは1822年4月に、イタリア北西部の港市ラスペツィア (La Spezia) の、Lericiに移り住んで、ここで抒情劇詩*Hellas* — これは、1821年、Pisaで執筆し、翌年に出版されたもの。詩人シェリーの存命中に発表された最後の長篇詩劇である。*Hellas*はギリシアの古名である。ギリシアの独立宣言に共鳴し、ギリシアの奴隷女のコーラスに希望の熱意にもえた抒情詩なのである — を完成したのであるが、しかし、すでに、別の劇詩*Charles I*の創作に手をそめていたという。然し、残念なことに、この劇詩*Charles I*は未完のままである。というのは、シェリーは、当時、Hunt一家をPisaに訪問して、Edward Ellicker William (1793-1822) — ウィリアムは、Shelleyの友人であって、インドに於ける東インド会社に騎兵隊に加わった人である。1821年に、Pisaで、Shelleyと知り合ったのであるが…。 — と一緒に、イタリアの西部Tuscany地方の港、レグホン (Leghorn) から舟にのり、La Speziaにむかって出帆したのであるが、途中、溺死したために、未完成のままに終わってしまった、謂れ付きの作品なのである。

7 James I世という人は、ご存知のように、イングランドの国王 (1603-25) である。James I世は、スコットランドの女王メアリー (Mary Stuart) の子供である。彼は、James VI世として、スコットランドの国王 (1567-1625) であったのであるが、しかし、Elizabeth I世の死後、イングランドの国王を兼ねていた王である。母親のMary StuartのStuartという名前を用いて、イングランドに、「スチュアート王朝」時代を創始した国王でもある。その治世中に、『欽定訳聖書』(The Authorized Version of the Bible) が完成した事で、有名である。

8 「ピューリタン革命」の指導者は、クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599-1658) という天才的な将軍である。クロムウェル将軍は、1642年に内戦が始まると、「議会派」(Parliaments) の軍隊を率いて、国王の軍隊と戦ったのであるが、大勢が明らかになったのは、1645年のNaseby — ここは、イングランド中部Northamptonshire州の村である。 — の戦いであったようである。1647年に、国王との間に妥協がとりかわされたのであるが、翌年の48年に再び交戦状態となり、とうとう、1649年には、国王を処刑し、共和制を用いて、自らは「護民官」(Lord Protector) の地位についたのである。しかし、「王党派」(Royalists) の抵抗はその後、すなわち、国王処刑後も続き、完全に戦闘状態を終息させたのは、1651年のWorcester — こ

は、イングランドHereford and Worcester州の首都であって、イングランドの三大河川の1つ、セバーン河の畔にあって、大聖堂のある都市である — の戦いであつたらしい。

9 Charles I 世は、1649年に処刑されたのであるが、息子のCharles II 世は、Charles I 世の死刑を宣告した法廷に列席した全員を逮捕して、翌日、下院は故クロムウェルらに改めて反逆罪を宣告したと言うのである。そして、クロムウェルの死体は、後1661年に墓から掘り起こされて、刑場に運ばれて、斬首されたという。

10 P. ミルワード著・舟川一彦訳『イギリス風物誌』、スタンダード英語講座〔11〕（東京、大修館書店、1983年）、P. 73、ll. 20-21.

11 Charles II 世（1630-85）は、父親のCharles I 世のあとの、イギリスの国王（1660-85）となった人である。彼は、清教徒革命中はフランスに亡命し、革命後の「王政復古」（the Restoration）で、イギリスの国王となるのであるが、1678年の、いわゆる、「教皇派陰謀事件」（the Popish Plot）で、暗殺されそうになったという人物なのである。これは、カトリック教徒がイギリスの国王Charles II 世を暗殺して、政府転覆をはかり、そして、カトリックの復活を企図した、といわれている架空の陰謀事件である。どうも、Titus Oates（1649-1705）という男が偽証したために、多くの教徒が無実の罪で処刑された、という忌まわしい事件なのである。

12 James II 世（1663-1701）は、イングランドの国王（1685-88）となった人であるが、また、James VII 世として、スコットランドの国王も兼ねた人物である。彼は、「名誉革命」（The Glorious Revolution）によって、王位を追われて、フランスに亡命した人なのである。

13 渡部昇一・ピーター・ミルワード共著『物語英文学史 — ベオウルフからバージニア・ウルフまで』（東京、大修館書店、1981年）pp.252-253。

14 Thomas Babington Macaulay, *The History of England* (London: J.M. Dent & Sons, LTD, 1848, 1855)。幸運にも、中村経一は、『マコーリー 英国史』（上巻・中巻・下巻）と題して、昭和23年12月15日に、旺世社から翻訳出版している。

15 中村経一訳『マコーリー 英国史』（上巻）（東京、旺世社、1948）pp.94-95。

16 アルミニウスは、ロッテルダムに近いオーデワテルの刃物師の子として生まれる。父は早逝したために、マールブルク大学のスネリウス（Snellius）の許で、16才まで養育された。祖国オランダに帰って、ライデン大学でダネウス（Danaeus）に師事し、神学を学んだ（1575-82）。さらに、スイスのジュネーヴで、ベザ（Theodore Beza, 1519-1605）について、また、バーゼルで、グリニウス（J.J. Grynaeus, 1540-1617）について学び、ローマなどへの、ヨーロッパ旅行ののちに、アムステルダムに住んで、改革派教会の説教者となった人物なのである（1588-1603）。Arminusは、反カルヴァン主義者コールンヘルト（Dirck Volckertszoon Coornheert, 1522-90）の著書に反対して、スーブララサリアン（墮罪前予定説）として活躍していたが、コールンヘルトが異端宣告を受けた時、彼は調査委員会に呼ばれて意見を聴取されているうちに、カルヴァン派の共通的信仰である予定の教理に疑問を持つようになったようである。ライデン大学は、ユニウス（Franciscus Junius, 1545-1602）の後任として、アルミニウスを迎えようとした（1603）が、予定論争がただちに尖鋭化し、正統カルヴァン派の有力者ゴマルス（Franciscus Go

marus,1563-1641) 派と対立するに至った。陪審官が、この2つの陣営の間に入って、解決を図ったが効なく、相互に寛容するようにすすめたが、しかし、ゴマルス側は承知せず、再び討論会を催し(1609・8)、最初は口頭で、次回は文書で意見を発表させることにしていたのであるが、その秋に、不幸にして、アルミニウスが没したのである。(教文館発行『キリスト教大事典』1963年、p.48.)

17 編集委員長桑田秀延『キリスト教大事典』(東京、教文館、1963年)、pp.48-49.

18 Ibid.

19 Ibid.

20 Puritansとは、‘those who wished to purify the Church of England’の意味である。これは、外部からの蔑称であつたらしいが、しかし、教義としてはスイスの宗教改革者ジョン・カルヴィン(John or Jean Calvin,1509-64)の「長老制度」(Presbyterianism)を主体としたものである。ご存知の通り、The Church of Englandというのは、HenryⅧ世によって、1534年に設立したもの、すなわち、ローマ・カトリックから離れて、プロテスタント化した「英国教会」であって、そのプロテスタント化が不徹底であり、生温い改革だとして、「英国教会」の改革をいっそう押しすすめ、‘purify’(浄化)することを求めた人たちのことを、puritansというのである。Queen Elizabeth I世時代のPuritansは、主として、「教区民」と「聖職者」の同権をとえ、「長老」は職業的な司祭でなく、福音の伝道者であるべきだとする「長老制度」であったことに、注目しよう。

21 Calvinismとは、フランスの宗教改革者カルヴィン(Jean Calvin,1509-64)が唱導したものである。時には、カルヴィン自身の考え方を變形し、修正しつつ発展していった、プロテスタント主義のなかの1つの系統であると言った方がより正しいかも知れない。①教会の形態という点からみると、「改革派教会」、あるいは、「長老派教会」と呼ばれていて、「監督教会」と、「会衆派教会」(Congregationalism)との中間に位置している教会組織の1つの形式である。②長老主義(Presbyterianism)というのは、簡単にいえば、牧師と、信徒の代表として選ばれた長老とが同等の立場に立って、——ただし、牧師は指導的な役割を果しつつ——各個の教会内における訓練や政活を行い、さらに、階層的に秩序づけられた教会会議(Synod)によって、全体教会に関する事項の決定がなされる仕組みなのである。(『キリスト教大事典』P.237.より)

22 Peter B. High著、八木敏雄注釈者『アメリカ文学史概説』(東京、英潮社、1986年)、p.10.

23 正統カルヴィン派の有力者は、ゴマルス(Franciscus Gomarus,1563-1641)というオランダのカルヴィン主義神学者である。ゴマルスは、ブリージュに生まれ、イギリスに渡って(1582)、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学に、また、ハイデルベルク大学にも学び、フランクフルトのオランダ人改革派教会の牧師となった(1587)人物なのである。がしかし、迫害によって解散(1593)し、ライデン大学の神学教授に招かれ(1594)、アルミニウスのペラギウ斯的教理に反対して激しく論駁した(1603)ことは、すべてに上記に説明した通りである。ゴマルスは、厳格なカルヴィン主義者として、「墮罪前予定説」を主張し、反アルミニウス主義陣営の闘将としてその指導的位置にあった人物なのである。(『キリスト教大事典』P.424より)

24 Peter B. High annotated by Toshio Yagi & Masaru Ohba, *An Outline of American Literature* (Eichosha Commentary Booklet) (Tokyo, Eichosha, 1986), PP.10–11.